

認知症ケア専門士
領域Ⅲ『論文投稿：ショートレポート』

認知症高齢者へのペット型ロボットセラピーが
行動・心理症状に及ぼす影響

研究計画書

医療法人啓清会 関東脳神経外科病院 看護科

研究代表者 木檜 沙織

第1版 制作年月日：令和4年4月1日

1. 研究名称

認知症高齢者へのペット型ロボットセラピーが行動・心理症状に及ぼす影響

2. 研究実施体制

本研究は以下の体制で実施する。

- 1.研究責任者 関東脳神経外科病院 看護科 看護師 木檜 沙織
- 2.研究分割者 なし
- 3.個人情報管理者 関東脳神経外科病院 病院長 清水暢裕
- 4.外部分析機関 なし

3. 研究背景・動機

世界が新型コロナウイルス感染症により、情勢が大きく変わったことは、記憶に新しい。ひととひととの繋がりが制限され、安易に出かかけることも減った。私も含め健康な人でさえ、滅入るこのコロナ渦で、入院中の、しかも認知症高齢者の世界は、どのようなものだろうか。面会は禁止、信頼する人とも会えず、常識が理解できないために、マスクも装着出来ず、素手で他患の私物も触ってしまう。自分を守ることも出来ず、孤独で、強い帰宅願望や徘徊、妄想や暴力行為、不穏症状など（以下 BPSD という）が出現してしまうのは、仕方がないことなのだろうか。

彼らの傷ついた心を癒すには、病棟スタッフが 1 人 1 人に対応できれば良いのだが、どうしても時間は限られてしまう。そこで、私はロボットセラピーに注目した。近年ロボットセラピーは医療、介護福祉、小児教育にも拡がり始めていることを知った。安全で、安易に購入も可能、当院スタッフの負担も軽減できるのではないかと考えた。

また、人は高齢になると体力や寿命、病気や金銭的理由などの理由で、『ペットを飼う』ことをあきらめることが多いという。ペット型ロボットセラピーは、入院中の認知症高齢者の心のケアに、本当に役立つのか、また、生活の質（ Quality Of Life 以下 QOL という）や日常生活活動（ Activities Of Living 以下 ADL という）向上・改善につなげられるのではないかと、実際に使用し、考察していきたい。

4. 研究の目的及び意義

ロボット型ペット（以下をクーボという・※別添にて資料を添付）を認知症高齢者に使用することで、行動、心理症状に影響があるのかを調べる。

5. 研究の期間及び方法

(1) 研究実施期間

2022年6月～2022年12月（7か月間）

(2) 研究のアウトライン

認知症を患い、BPSDによりスタッフが対応に困っている患者に対し、クーボと触れ合うことで、どのような行動・心理状態に変化があるのか、どのように関わっていけばいいかを考察し今後の看護に活かしていく。

また、患者のQOL、ADL向上につなげられるか、考察していく。

(3) 研究のデザイン

調査・量的研究：実践報告である

(4) 研究の実施方法

- (5) ・クーボを同じ日数、時間数（同じ時間帯はリハビリスケジュール優先の為、困難）、触れ合ってもらう。30日間、1日合計1時間程度を考慮している。
- ・年齢、性別、在院日数、家族背景、要介護度別に統計をとる
- ・介入前後での機能的自立度評価法（以下FIMという）の『認知項目』の点数比較
- ・介入前後での改定長谷川式簡易知能評価スケール（以下HDS-Rという）の点数比較
- ・介入前後での阿部式BPSDスコア（※1 別紙参照）を使用した点数の比較

(6) 目標症例数

5件

(7) 目標症例数の設定根拠

- ・私1人が平日昼間、対応できる人数が月1～2名
- ・クーボは1台のみ使用。感染防止の点で、1人ずつ使用していくため。

(8) 調査項目と資料・情報の収集方法

- ・電子カルテの看護記録・MSW記録
- ・HDS-Rの急性期病棟入院時、回復期・リハビリテーション病棟への転入時、クーボを使用し1か月後の点数
- ・転入時、1か月後毎のFIMのうち『認知項目』の点数
- ・介入前後での阿部式BPSD評価表のスコアの点数
- ・患者本人の表情、言動、睡眠時間、リハビリへの意欲

6.評価項目

- 1、年齢、性別、在院日数、家族背景、要介護度
- 2、日常生活機能評価の点数の比較
- 3、HDRS の入院時、転入時の点数
- 4、転入時、1 か月後毎の FIM（認知項目）の点数
- 5、介入前後での阿部式 BPSD 評価表の点数
- 6、対象患者の介入前後での表情、言動、睡眠時間、リハビリへの意欲が変わったか、などの声掛けを行う

7.研究対象者の選定方法

- (1) 選択基準
 - ・ HDS - R 20 点以下
 - ・ FIM の認知項目（5 項目）各 5 点以下
 - ・ 上記点数に限らず、B P S D が顕著
- (2) 除外基準
 - ・ HDRS 21 点以上
 - ・ FIM の認知項目各 6 点以上

8.研究の変更、中止

本研究の研究計画書等の変更または改訂を行う場合は、あらかじめ関東脳神経外科病院倫理委員会の承認および病院長の許可を必要とする。

9.インフォームド・コンセントを受ける手続き等

- (1) 研究内容の公開
 - 目的を含む研究の実施についての情報を紙面を用いて患者、家族に説明を行う。
 - (※2 別紙参照)
 - また研究員の連絡先を明記することで研究対象者が拒否できる機会を保障する。
- (2) インフォームド・コンセント
 - 患者本人、家族から依頼があれば、研究責任者が誠実に対応する。

10.個人情報の取り扱いと匿名化の方法

本研究で取り扱う試料・情報等は、個人情報管理者が匿名化したうえで研究・解析に使用する。匿名化の方法については、誰のものか一見して判別できないよう、本研究で取り扱う情報から個人を識別できる情報を削除し独自の符号を付す作業を行う。個人情報と符号の対応表は、個人情報管理者が厳重に保管する。また、本研究の成果を学会発

表および論文発表する際には、研究対象の個人を特定できる情報は一切使用しない。

11. 研究対象者に生じる負担並びに予測されるリスク及び利益、これらの総合的評価ならびに当該負担及びリスクを最小化する対策
 - (1) 予測される利益
個別性看護の提供、BPSD の減少、スタッフへの負担の軽減
 - (2) 予測される危険と不利益
クーボを受け入れられず、投げることによりクーボの破損

12. 試料・情報の保管および廃棄の方法

研究対象者の本研究終了後に継続する通常診療において活用される従来の診療情報については、医師法等の関連法規に従い保管する。本研究の実施の為に匿名化され取得した研究関連情報については、研究責任者の所属する部署の外部から切り離されたコンピューターのハードディスク内に保管する。情報を取り扱う研究者は、研究情報を取り扱うコンピューターをパスワード管理し、情報の紛失・遺漏等に十分配慮した取り扱いのうえで保管する。

本研究終了後において、本研究で得られた研究対象者の情報を他に研究において使用することはない。研究責任者は、研究終了後、研究等の実施に係るデータ及び文書を研究の中止または終了後少なくとも 5 年間、あるいは研究結果発表後 3 年が経過した日までの間のどちらか遅い期日まで保管する。その後、個人を特定されないよう処理したうえで破棄する。なお、通常診療に用いる医療情報の管理・破棄は医師法等の関連法規の規定に従うこととする。

13. 研究期間への長への報告内容及び方法

- (1) 研究の実施の適正性若しくは研究結果の信頼を損なう事実等の情報を得た場合
研究責任者は、研究の実施の適正性若しくは、研究結果の信頼を損なう事実若しくは情報または損なう恐れのある情報を得た場合は、速やかにその旨を当該病院長へ報告する。
- (2) 研究の倫理的妥当性もしくは科学的合理性を損なう事実等の情報を得た場合
研究責任者は、研究の倫理的妥当性若しくは科学的合理性を損なう事実若しくは情報または損なうおそれのある情報であって、研究の継続に影響を与えると考えられるものを得た場合は、遅延なくその旨を該当病院長へ報告する。
- (3) 研究終了（中止の場合を含む）の報告
研究責任者は、研究を終了したときは、その旨及び研究の結果概要を文章により病院長へ報告する。
- (4) 研究に用いる資料及び情報の管理状況

研究責任者は、得られた情報等の保管について、必要な管理を行い、管理状況について病院長へ報告する。

14. 研究の資金源等、研究機関の研究に係る利益相反及び個人の収益等、研究者等研究に係る利益相反に関する状況

(1) 研究資金

病院にてチェックリストやアンケートの印刷を行うが研究対象者に費用負担はおこなわない。

(2) 利益相反

本研究の計画・実施・報告において利益相反はない。

15. 研究に関する情報公開の方法

本研究の成果は日本認知症ケア学会の『認知症ケア 事例ジャーナル』へ投稿する。掲載するかは、上記学会がランダムに選択するため、必ず掲載するものではない。

16. 研究対象者及びその関係者からの相談等への対応

研究対象者等及びその関係者からの相談については以下の相談窓口にて対応する。

【相談窓口】

研究責任者

関東脳神経外科病院 看護科 木檜 沙織

〒360-0804

熊谷市代 1120

TEL：048-521-3133

17. 委託業務内容及び委託先の監督方法

本研究における委託業務なし

18. 使用文献

- ・ 認知症ケア 事例ジャーナル 2021 Vol.14
- ・ 山下徹、阿部康二：認知症臨床における阿部式 BPSD スコア（ADS）の有効性
老年期認知症研究会誌 22 （2015）
- ・ 前田傑、尾寄遠見、川又敏男：精神科病院における認知症医療：心理行動症状への対応
精神神経学雑誌 115 （2013）
- ・ WEB 介護ロボットはどこまで役に立つ？メリットと今後の課題

https://www.irs.jp/article/?p=68&utm_source=yahoo&utm_medium=cpc&utm_campaign=yss_listing_ds&argument